

租界班 第44回研究会

(2014年度 非文字資料研究センター 第2回公開研究会)

国際シンポジウム 中日関係と広州近現代史研究

日時：2014年6月28日（土）9：20～18：00

会場：広東国際戦略研究院会議室

共催：広東国際戦略研究院東亜研究中心 / 広東外語外貿大学日本語学部 / 神奈川大学非文字資料研究センター

報告1：広州のシンポジウムでの報告

大里 浩秋

6月26日から29日、同僚3人と広州に出かけて、広東外語外貿大学（以下、広東外大と略す）で開かれたシンポジウム「中日関係と広州近現代史研究」に参加した。新白雲国際空港に降り立ってすぐに身に迫ってきた日本の真夏日とはおよそけた違いの暑さと、広東外大近くの果物屋で買って食べた旬の荔枝のおいしさに、広州に来たことを実感した。以下、この時のシンポジウムで報告された数人の報告内容と、私が話した内容を紹介するとともに、別の一日に市内観光をした際の印象のいくつかを記すことにしたい。

6月28日に実施したシンポジウムは、広東外大の広東国際戦略研究院東亜研究中心と日本語学部、神奈川大学非文字資料研究センターの3者が共催したもので、報告は順に、

曹善玉（中山大學）「移民、留学と革命—20世紀20～30年代の中山大學韓国人留学生研究」

孫安石（神奈川大學）「広東省の来日留学生関連資料の紹介—1920年代を中心に」

趙曉靚（広東外大）「吉野作造と満蒙權益論」

朱琳（神奈川大學）「二つの中国認識—吉野作造と内藤湖南」

濱下武志（中山大學）「中国海関史研究の新たな動向」

張伝宇（暨南大學）「広東日本商工会議所研究」

村井寛志（神奈川大學）「新中国成立前後の難民流入と港英政府の対応、1949年」

韋立新（広東外大）「日本軍占領期間の広州における新聞出版—日本軍や傀儡政権の新聞を中心に」

大里浩秋（神奈川大學）「広州と日本人—雑誌『兵隊』を主な素材として」

である。

このうち曹善玉報告は、副題が示すように1920～30年代に中山大學に留学した、極めて政治的色彩を帯びた朝鮮人の動向を紹介するものであった。同時期黄埔軍官學校に入学した朝鮮人もおり、そうした受け入れは広東国民政府と在華韓国独立運動団体が協議した結果だという。張伝宇報告は、1937年に広州に創立されて以降の広東日本商工会議所の動向を中心に、日本軍占領期を通じての広州在住日本人の状況を紹介するものであり、韋立新報告は、日本軍占領期の広州における新聞出版の概略を紹介するとともに、中日文化協会広州分会などの活動を通じて、占領地域に対する日本軍の「文化戦略」の中身に考察を加えたものであった。これら3人の報告はいずれも私にとってはまったく知らなかった内容であり、とくに張報告からは、近代以降1945年までの広州における日本人に関する資料はかなり調べられていることが窺われて、今後彼らの研究にさらに学びたいと思った。

次に、手前勝手であるのを承知で、上記3人以外の報告には50年来の友人濱下さんの報告を含めて触れず、広州について調べたり読んだりして感じたことを恣意的に並べたに過ぎないものながら、私が報告した内容を紹介したい。

私はまず、東亜同文会機関誌を取り上げ、そのうちの『東亜時論』や『東亜同文会報告』に数回載った「広東通信」、「広東来信」と題した記事によって、1899年、1900年に東亜同文会の会員が広州で新聞を発行したり、日本語學校を開設したりして、中国に対する日本の影響力を増そうとしたが失敗に終わったことを紹介した。周知のごとく、東亜同文会は日中親善を唱えつつも西洋諸国に負けじと中国における特権を得ることを主張して政府の大陸政策を後押しした団体であり、1945年の敗戦まで延々と機関誌を発行している。そこには多くはないものの広州・広東に関する記事も時

折載っているが、ごく少数の日本人が広州に潜り込んで何やら画策した上記のような動きについて、私は興味をひかれているのである。

次に、草野心平（1903—1988）、火野葦平（1907—1960）、和久田幸助（1915—？）らの広州との関わりを、彼らの著書を通じて紹介した。

草野は、1921年から広州に滞在し、今の中山大学のキャンパスにあった嶺南大学に留学していたが、上海の五・三〇事件に端を発して起こった25年の沙基事件によって広州でも排日運動が高まったことから、やむなく帰国するという経験をしている。さらに40年から敗戦までは汪精衛政権に協力して南京にいたこともあって、その辺の話を聞きたくて私が取材を申し込んでご本人から承諾の返事をいただいたが、ついに実現に至らなかったという残念な思い出がある。火野は、1937年に日中戦争勃発で出征し、従軍記『麦と兵隊』を発表して評判を得た後、38年の広東侵攻作戦に南支派遣軍報道部員として参加、その従軍経験を今度は『広東進軍抄』と題する1冊にまとめ、広州で報道部機関誌『兵隊』創刊時の編集を主導した。草野も火野も、戦後1950年代半ばに中国政府に招待された旅行団の一員として別個に訪中しており、その折の見聞をそれぞれ『茫々半世紀』、『赤い国の旅人』の題で公刊しているが、とくに火野は、戦時中に自らが果たした軍隊内外での役割を反省しつつ、それから十数年を経て訪れた中国の変貌ぶりに触れ、その中で広州の様子に詳しく言及している部分は、私にはとても興味深かった。さらに和久田は、1934年から43年に広州と香港に滞在して、南支派遣軍の通訳や香港占領軍報道部芸能班長などを務めており、その経験を基にして書いた一連の『私の中国人ノート』は、当事者ならではの内容を含んでいた。

といったようなことを話した後で、火野が編集に関わった上述の雑誌『兵隊』を取り上げて、その中の記事や写真の一部を紹介しつつ、この雑誌の特徴をどうとらえるかについて、私の感想を述べた。

『兵隊』は、1939年5月から44年5月まで月刊で計39冊発行された。復刻版を出すにあたって、出版社（刀水書房）が宣伝用パンフに並べたこの雑誌の特色は、次のようなものである。「・日本の兵隊の生きて生活した記録・戦っている兵士の投稿という他に例のない雑誌・兵士だけでなく、広東在留邦人や台湾人、現地中国人も書いている・一切の検閲がなかった。当時、内地にもない驚くべき戦時下の自由。これは南支派遣軍報道部長馬淵逸雄と初代編集長火野葦平の間で、「ありのままに書く」ことこそを重視していたかららしい。」などなど。私は、この宣伝文を頭に置きながら、『兵隊』のページをめくってみて、出版社が書きだしたこの雑誌の特色にそれほどの違和感を覚え

なかったのは、軍隊特有の使命感や命令調は誌面にあられることがあるにはあるものの、緊張を和らげるような穏やかな調子で、軍事情報や兵士の日常以外に在留日本人や現地住民の情報を拾い、周囲の農民のスケッチや街中の風景写真をふんだんに使った構成になっているからだと思った。しかし、そうだとしても、この雑誌には一切の検閲がなく、内地にもない自由があったとはとてもいえなからうというのが、私の感想であり、私の報告を聞いてくれた人が共通して感じたことであった。逃れようのない戦場で聖戦を担わされている兵士たちが「自由に」発する言葉は、美しくもあり悲しくもあるというべきか。

申し遅れたが、軍隊自らが発行した『兵隊』という雑誌があることを教えてくださったのは、画家の石田一郎さんだった。敗戦直前に日華学会の事務を担当していた方だと戸川芳郎先生に伺って、並木頼寿さんと神田の日華学会旧址、今の東方学会の建物の一室でお話を伺ったのは2007年のことだが、日華学会での体験を伺う前に、戦前広州で南支派遣軍の戦闘に参加し、のちに報道部に移籍して『兵隊』の編集に携わり、自分が周辺の農村でスケッチした絵が時折誌面を飾ったという話に発展したのである。そして、その時石田さんにいただいた「戦争と私の兵隊観」という文章を後で読むと、石田さんは昭和14（1939）年11月に広州市北郊「白雲山麓の近衛師団編成の第21迫撃砲大隊」に配属されたとあった。

そこでもう一つ申し遅れたことを述べさせていたが、私が1980年に日本語教師として3年近く滞在した広州外国語学院、今の広東外語大は白雲山麓にあり、赴任した当時は、キャンパス内に日本軍が使った倉庫が売店として使われ、キャンパスの外に足を延ばすと、兵舎だったと思いきぼる屋が残っていて小学校として使われていた。また、市内に通じる道路脇には数か所に格納庫や見張所がそのままの姿で残っており、道路からかなり入った野原には、某部隊忠魂碑が裏寂れた風情で建っていた。月日が経ちそのあたりは面目を一新して、今はどこに何があったのか見当がつかなくなってしまうが、かつて私が恐る恐る先祖の亡霊を訪ねる気分で覗いた建物群は、その40年ほど前に石田さんも出入りしていたかもしれない場所だったのである。

以上のような因縁から、広州における日本軍や広州に住んだことのある日本人への関心に広がり、雑誌『兵隊』に行き着いて、今回の私の報告になったという次第。ささやかなシンポジウムで報告しあったことがきっかけとなって、広州と日本人の関係を通しての日中関係史の研究が今後一層進むこと、また、『兵隊』に載った図像を含む各種の情報を中国の研究者も利用することで、広州の歴史の空白を埋める作業が進むことを願っている。



今回マイクロバスをチャーターして回った先は、順に黄埔軍官学校旧址、中山大学、沙面旧英仏租界、農民運動講習所、中山紀念堂。

黄埔軍官学校は、私の記憶にある30数年前のそれとは異なり、その周囲に土産物屋や食堂が並び、住宅もかなり建っていてかつての寂れた環境とは違っていた。敷地内も孫文や蒋介石などのオフィスのある建物だけを見て回った記憶からすると、1990年代に再建したという(1938年の日本侵攻の際の空爆で焼け出されたと記した看板があった)本部や学生宿舍が立派で、なぜか復元というより造りかえられた空間を見せられている気になった。ちょうど開校90周年の展示があつて多くの参観者でにぎわっていたが、ふだんはどうだろうか。中山大学は、上述草野心平が留学した嶺南大学のキャンパスを1950年に引き継いで今に至っているが、ちょうど卒業時期とあつて、中国指折りの緑豊かなキャンパスはガウン・帽子姿の卒業生とその保護者でにぎわっていた。彼らがあちこちで記念写真を撮るのを横目にして、広場に鎮座する梅屋庄吉が寄贈した孫文の銅像と、キャンパス内に保存公開している嶺南・中山両大学で歴史を教えた陳寅恪の旧居を参観した。

沙面にある旧英仏租界は、数年前に行った時よりも公開性が進んでいる観があり、中を見せる建物もあつたし、軒並み由来を記したプレートがついていた。西洋人女性にその辺を歩かせて写真に収めている集団があり、洋館をバックに結婚の記念写真を撮るカップルも数組いた。もともと他地の租界よりも独立した立地状況にあつた沙面は、いつの頃からか帝国主義の建物群として否定すべき存在ではなくなつてしまつたのだろう。農民運動講習所は、私には馴染みの場所だったが、今回行って、一番の見せ所と思える教室が机や黒板を片付けられて鄧小平の生涯を多数の写真で説明する場所に転じているのを知り、がっかりした。最後に寄つた中山紀念堂は、日本占領期にそれを正当化する各種の集会を住民動員の下で開いている写真が多数『兵隊』に載っているのを思い出しながら見上げた。

(なお、この小文は『中国研究月報』2014年7月号に発表した内容に一定の増減を加えたものであることをお断りします。)

報告2：1920年代の広東省からの来日留学生関連資料の紹介と雑感

孫安石

2014年6月に開催された「中日関係と広州近現代史研究」の内容についてはすでに大里浩秋が「報告1」で記しているのので、ここでは私の報告「1920年代の広東省からの来日留学生関連資料の紹介」と会議に参加して感じたことを一つ述べておくことにしたい。

孫安石「1920年代の広東省からの来日留学生関連資料の紹介」は、広東省出身の日本留学生らが中心になり、1920年5月に親睦団体として「珠江読書会」を組織する動きを紹介するものであつた。この組織の創立に向けて日本側では広東領事館と台湾銀行、三井洋行などが資金を出資し、中国側では広東省長公署印刷官報局長(広東中華新報社長を兼任する)容伯挺が中心となつて寄付金を集める計画であつたが、その大部分を日本側が出資するという内情が広東省の新聞に報道されたことで10月には早くも解散に追い込まれることになった。

図1 「珠江読書会創設籌備費」(外務省外交史料館所蔵、請求番号B-1-3-1-137より)

次に1920年代の広東省の来日留学生と日本との接点は、対支文化事業の開始という点からも生まれてくる。広東で発行された『七十二行商報』や『廣州民国日報』などの新聞は、日本人の中国視察が華北地域に集中していることを度々批判し、中国の三大都市(北京、上海、広東)の一つである廣州にも公平な施設を設置することを要求していた。その内容は、北京の人文科学研究所、上海の自然科学研究所に次ぎ、廣州に工業試験所(中華工学会の要請)、または応用科学研究所(日本留学出身の200名の要請)、または医学校の設置を要請するものであつた。その他に、台湾総督府が運営に参加した「博愛会医院」に対する経済的な支援なども要請された。

ところが、1930年代に入ると東方文化事業の支援は、今までとは違い広東省の警察官僚の養成に集中的に投入されることになった。日本側の外務省外交史料館の資料によれば、広東では、広東高等警察学校の卒業生を日本の警察学校に入所させる計画が持ち上がり、1939年の中華民国維新政府が成立された際には、広東治安維持会の活動を支援する動きが活発になつたのである。

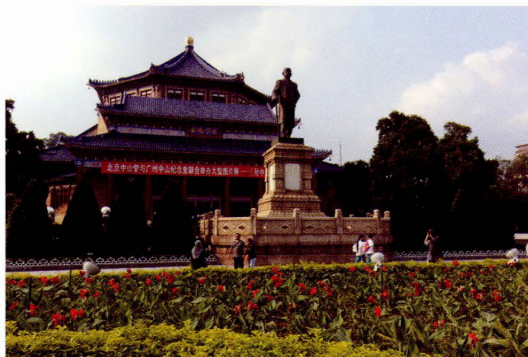
以上、本報告は広東省の日本留学生と関連のある動きについて紹介したが、中国の出身省別の日本留学生に着目した研究は一部、浙江省、江蘇省、湖北省、直隸省などがあるが、その他の省の出身地別の分析はまだ可能であることに気付いた。例えば、清末の留日学

生監督処が発行した『官報』によれば、湖北省は鉄道関連の留学生を多く派遣し、奉天省は師範学校と女子留学生の派遣に力を入れ、山西省は農業関連の留学生派遣に重点を置いたことが分かる。今後の中国人日本留学生史研究を進める時にこのような省別の留学生派遣の特徴はより注目されても良いのではなかろうか。

あと、もう一つ全体の会議に参加し感じたことは、広州と日本に関連する研究が、上海などその他の都市に比べて遅れをとっているのではないかという点であった。日本における上海研究は、1990年代から日本上海史研究会の活動などもあり、幾つかの共同研究の成果が発表されている。また、上海の中国人研究者も日中関係や上海の日本人居留民に関する研究に積極的に取り組んでおり、『上海的外国文化地図』系列叢書（上海文芸出版社、2010年）が刊行されるなど上海と外国（アメリカ、イギリス、フランス、ドイツ、ロシア、日本、韓国）の近現代史の接点を究明しようとする動きが活発である。それに比べれば、広州と日本（その他の外国）との関連については未解明のところが多い。報告者の一人の韋立新氏は、日中戦争以降、日本に占領された広州で出版された新聞として『広東迅報』、『南支日報』、『中山日報』、『群声日報』、『公正報』、『新越晩報』などを取り上げたが、筆者はこれらの新聞をまだ見たことがなく、ぜひとも関連研究が継続してなされることを期待したいと思った。



中山大学キャンパス内の石碑



広州中山紀念堂一真ん中に建っているのは孫文の銅像

報告3：中華人民共和国建国前後の難民流入と英領香港政府

村井 寛志

1949年10月の中華人民共和国建国前後の香港—中国大陸間の入境政策について、イギリス公文書などによりイギリス側の対応を明らかにするとともに、中国語紙によって香港の中国人社会の反応を考察した。

日中戦争や、太平洋戦争期の日本占領を経て、香港の人口は急激な増加と減少を経験したが、戦後、1947年頃には国共内戦の激化に伴って、再び大陸側から急激な人口流入が見られた。これを受けてイギリス政府内部では、アヘン戦争以来慣習上認められてきた中国人の香港への入境の自由についての見直しが議論されるようになる。中国人の入境の権利の慣習を重視する外務省と、その制限を主張する植民地省の間には見解の相違があったが、最終的には後者の主張に沿った入境規制法が制定される。

とはいえ、香港総督グランサムは、香港の自由港としての地位を守るため、また、難民の流入は一時的なものに過ぎないとの楽観的な見通しから、実際の規制強化に対しては消極的であった。しかし、1950年以降中共による基層政権掌握の過程で「反革命」のレッテルを貼られた様々な難民の流入は、帰還や転出が望めない、新たな難民問題を引き起こした。ここに至り、英領香港政府は境界を鉄条網で封鎖し、入境規制の強化を図ることとなる。

これに対する中国語新聞における反応として、境界を往来して商売をする中国人商人からは反対の声が挙がったが、一方で、上海人の流入に反発する立場から、入境規制を歓迎する評論も出された。

なお、ワークショップ終了後、私費にて延泊して中山大学図書館を訪れ、同所蔵の『南方日報』など、報告で扱った時代の広州で刊行されていた新聞の調査を行い、香港と隣接する広東省の側から見た同時期の報道を通して、報告内容の補強を行うことができた。



会議の様子